

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「ユッケ復活の兆し、パック入りの市場拡大」
- 2) 「南海電鉄、食品販売に参入」
- 3) 「ピアガーデンならぬ“こたつガーデン”に予約が殺到！」
- 4) 「紙の太陽電池、コスト10万分の1」

1) 「ユッケ復活の兆し、パック入りの市場拡大」

焼き肉チェーンによる集団食中毒問題を受けた規制強化で、焼き肉店からほぼ姿を消していたユッケが復活の兆しをみせている。全国の焼肉店で作る「全国焼肉協会」が昨年11月、店での加工の必要のないパック方式のユッケの提供マニュアルを策定。それに基づき、焼き肉ホルモン「こてっちゃん」で知られるエスフーズなどが商品化し、市場が急拡大している。

焼肉チェーン「でん」では昨年12月からパックユッケを仕入れ、牛肉のユッケをメニューに復活させた。1人前980円と規制強化以前に比べ割高。パックユッケは、専用設備を持つ業者でユッケ用に加工した生の牛肉を、1人前分ずつに密封した状態で冷凍し、飲食店向けに販売する。飲食店は生卵やタレを添えてパックのまま提供するだけ。客が自らまぜるスタイルを採用するため、店に設備がなくても提供することができる。

同協会が「パック方式なら生肉の安全性を確保できる」として提供マニュアルを策定。それに基づきエスフーズが和牛モモ肉を使った「黒毛和牛ユッケ」（50グラム）を開発し、その他の食品メーカーも相次ぎ発売しているという。同協会は「設備のない焼肉店でもパック方式なら安全にユッケを提供できる。価格面が課題だが、技術提案をしていけば安くしていける」と話す。

価格面では少し値がはるため最初は抵抗が強いかもしれないが、ユッケは元々人気の高い商品なので、安全性を元として徐々に一般化していくことに期待したいと思う。パックのままの提供も味気ないものがあるが、店の工夫にも注目したい。

2) 「南海電鉄、食品販売に参入」

南海電気鉄道は14日、食品販売事業に参入すると発表した。輸入食品などを販売するスペースにカフェを併設した「デリステーション&カフェ」の1号店を、難波駅に直結する商業施設「なんばCITY」南館2階に22日オープンする。

好立地を強みに通勤客や通学客を呼び込み、収益拡大につなげる狙い。1号店の業績を踏まえ、他の駅への出店を検討する。

店舗では輸入物のビールやワイン、菓子などを販売。カフェにはコーヒーや酒類などの飲料に加え、ベーグルや総菜などをそろえる。

店舗面積は約270平方メートルで、営業は午前10時-午後9時。運営は食料品の販売を手掛ける「デリカテッセン」に委託する。

現在も営業中の「Deli」がテナントから直営に変更になる模様。営業時間的に朝の通勤には向いていないが、ランチ利用や会社帰りにちょっと寄るには良さそうだ。場所は難波界隈の

一番奥にあたるため、開発が進む地下鉄駅ナカ施設などからは少し離れることになるが、運営が変わることによってどのように発展していくか注目したい。

3) 「ビアガーデンならぬ“こたつガーデン”に予約が殺到！」

日本の冬の風物詩・こたつは、エアコンや床暖房の普及により、近年は販売数の減少が続いていた。しかし3.11以降の節電需要の高まりを受け、再注目されて販売数が上昇。特に寒さが厳しいこの冬は、家電店で飛びように売れている。そんな中、人気を集めているのが、ビアガーデンならぬ「こたつガーデン」だ。

テラスに8卓を用意している東京・渋谷の「焼酎居酒屋 鹿児島 本家 かのや」は、こたつ席は連日ほぼ満席状態。1日平均30名前後が利用しているという。「これまで常連だったお客様も、こたつ席をリピートする方が多く、来店頻度がさらに上がっている。初めてご利用された方も、帰り際に次回のこたつ席を予約される方が少なくない」とのこと。

同店では「冬ならではの楽しみを提供したい」と考え、夏のビアガーデンのように空を見上げながら食事が楽しめる“こたつ席”を考案。2010年の冬に1卓の簡易こたつ台をテラスに設置し、翌年の冬は2卓に増やしたが、ほとんど利用者はなかった。

しかし2012年の冬、「こたつで鍋」をテーマに掲げて一気に8卓まで拡張し、隙間風が入り寒かったテラスを改装して居住性を高めた。また暖房設備を増やし、綿入りの暖かい半纏（はんてん）の貸し出しを行うなど、防寒対策を徹底。さらに田舎の茶の間をイメージさせるみかんのサービスや、トランプやTVの貸し出し、鍋メニューの充実など、寒さを忘れるようなツールをいろいろと準備した。その結果今シーズンは、急激にこたつ席の予約数が増えたという。

「来店したお客様が、こたつを見た瞬間に歓声を上げることも多い。暖かい、なつかしいという声もよく聞く」という。同店のこたつ席は2013年3月まで利用できる予定だ。

日常の中の非日常、非日常の中の日常というのは人の心をくすぐる。「居酒屋」と「こたつ」はどちらも目新しいものではないが、逆転の発想とモノの組み合わせで面白いモノを生み出し、しかもそれが時代に合っているという良い例だと思う。自分たちも“してやられた感”を与えるようなアイデアを出していきたいと思った。

4) 「紙の太陽電池、コスト10万分の1」

木材パルプを原料にした「紙の太陽電池」を、大阪大学産業科学研究所の能木雅也准教授らのグループが開発したと明らかにした。

太陽電池は小型化、薄型化の研究が進むが、今回は材質上、環境に優しいことが特徴。製造コストも従来の10万分の1に抑えられるという。厚さ1ミリ以下で折りたたむことができ、災害時に被災地で使うなどの用途が考えられる。

太陽電池は、光エネルギーを電気エネルギーに変換する部分（素子）と電気を運ぶ配線、これらを包み込む基板で構成される。基板は、素子に太陽光が届くように、透明なガラスやプラスチックを使うことが多い。

今回、グループは、木材パルプの繊維を厚さ15ナノメートル（ナノは10億分の1）と超極細にし、透明にすることに成功。これを基板に使った。さらに、素子には、一般的に使われるシリコンなどではなく、薄い膜状になる有機物を、配線には細い銀のワイヤを用いた。そ

の結果、電気の変換効率は3%と、家庭の屋根などに取り付ける一般的な太陽光発電パネルの10-20%よりも低いものの、今回と同じ素子を使ったガラス基板の太陽電池などと比べると同程度だった。

今回、試作したのは縦2センチ、横5リ。実用化した際の製造コストは、ガラス基板の約10万分の1、プラスチックの500分の1-5000分の1。製造方法も、加熱して配線を基板に付ける方法から、圧力を加える方法に改め、消費エネルギーを少なくし、環境に優しくした。ただ、素子が酸素や水に触れると劣化して発電できなくなる性質を改善する必要があり、数年後の実用化を目指している。能木准教授は「レジャーなどで実用化を目指すほか、超薄型の電子ブックなど、さまざまな用途に応用できるようにしたい」と話した。

どんどん技術が進化して、安く・軽く・薄くといったことを可能にしていく太陽電池。おまけに環境にやさしいとなれば、より期待が高まる。研究・開発が進んで誰もが簡単に手に入れられるようになり、満足のいく電力が生み出せるようになれば、環境問題の改善に大きく貢献するので、注目したいと思う。